

## エペソ人への手紙4章1-16節 「一致のための召し」

### 1A 御霊による一致 1-6

1B 謙遜による結びつき 1-3

2B 一つの神 4-6

### 2A 御体の建て上げ 7-16

1B 恵みの賜物 7-10

2B 奉仕の働きの整え 11-13

3B キリストに向かう成長 14-16

## 本文

エペソ人への手紙 4 章に入ります。私たちは、1 章から 3 章まで、いわば「座る」ことについて見ていきました。2 章 6 節に、「神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」とありました。私たちが、キリストにあっていかに、霊的に祝福されているのか、その恵みを受けているのかを知ることが、これまで読んできたところです。これらのことをパウロが話して、それで次は、「歩み」について見ていきます。いわば、赤ん坊が座ることを知ってから、初めて歩くことを知ることができるように、私たちキリスト者は常に、自分たちが、キリストにあっていかなるところにいるのかを知って、そこにしっかりと座って、それでようやく、歩み始めることができるということです。

4 章 1 節に、「召しにふさわしく歩みなさい」とありますね。17 節には、「異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」とあります。そして、5 章 2 節に「愛のうちに歩みなさい」とあります。15 節には「自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。」とあります。5 章 21 節からは、「従いなさい」という勧めに変わっています。ですから、4 章 1 節から 5 章 20 節までは、歩むことについて見ていきます。歩むとは、生活を生きていくことです。日常生活の中で、一定の方向性をもって生きていくことです。どんな歩みをしていますか？と問われている時に、どんな方向性で生きていますか？生き方は何ですか？と問われていますね。

### 1A 御霊による一致 1-6

1B 謙遜による結びつき 1-3

<sup>1</sup>さて、主にある囚人の私はあなたがたに勧めます。あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。

パウロは、ローマで、カイサルの法廷に立つために、囚人となっていることを思い出してください。「主にある囚人」と自分のことを言っています。これは、これから話す、召しにふさわしく歩むことに

ついて、彼が受けている恵みについて話しています。それは、彼がへりくだっていることです。自分でへりくだっているというよりも、囚人という姿でいることが、主によってそうになっているというところにあるへりくだりです。召しにふさわしく歩むとありますが、パウロは、これから一致すること、一つになって主に向かって成長することが、私たちの召しであることを話します。

私たちは、自分たちには十分に与えられている、豊かになっていると高ぶっている時は、一つになることができません。第二次世界大戦中に、オランダでユダヤ人たちをかくまった、コーリー・テン・ブームというクリスチャンがいました。彼女と姉は、同じ政治収容所に入れられました。同じ収容所に、いろいろな教派出身のクリスチャンたちがいました。彼女たちは、共にキリストの御名で祈ったのです。ここで初めて一致できました。ある人は長老派。ある人はバプテスト。ある人はカトリック。ある人は監督派など、いろいろな教派に分れ、それぞれ自分たちが正しいと主張し、また付き合いはなかったでしょう。けれども、囚人となった時の苦しみによって、それが主の許しの中で起こっていることを認めている時に、そこに御霊の一致があったのです。

パウロの語っている「召し」が、ここでは一致のための召しであることが分かるのは、これまで 1 章から 3 章で、彼はキリストにあって私たちが一つになっていることを話して来たからです。1 章 10 節で、「一切のものが、キリストにあって、一つに集められる」と言っていました。そして、「キリスト派、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し」と言っていました(2:15)。ユダヤ人と異邦人が一つになっているということです。そして、奥義が使徒たちに示されましたが、それは「異邦人も共同の相続人となり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」と言いました(3:6)。このように、すでにキリストにあって私たちは一つにされており、そして共に御国を受け継ぐように召されたのです。2 章 18 節で、「神の召しにより与えられる望みがどのようなものか…知ることができますように。」とパウロは祈っていました。その望みが、キリストにあって一つとなり、御国を受け継ぐことであったのです。

だから、その召しにふさわしく歩みなさいと勧めているのです。具体的には何なのでしょう？

<sup>2</sup> 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、<sup>3</sup> 平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい。

キリストにあって一つであるのだから、御霊によって一致を保ちなさいというのが勧めです。自分の意見と合う人、気の合う人たちと一つになりなさいと言っていません。教理や教義を一つにしなさいとも言っていません。組織的な一致でもありません。教理や教義、考え方、組織というのは大切ですが、パウロは、私たちの召しはキリストに似た者になることであって、そのキリストにあるご性質を身につけることによって、一つでいなさいと勧めているのです。

初めに、「謙遜と柔和の限りを尽くし」なさいと言っています。私たちには、肉の誇りがあります。そして強い意志を持っています。ギリシア人は誇りを美徳としていました。ローマ人は力、強い意志を美徳としていました。けれども、キリストにある恵み、その美は、誇りではなく謙遜であり、強い意志ではなく柔和です。

神の恵みを受け入れた者は、へりくだることができます。パウロは、「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵みが与えられた」と言っていましたね(3:8)。自分は神の教会を迫害し、滅んで、御怒りを受けるにふさわしい者なのに、その罪人のかしらを、神は敢えて選ばれて、異邦人に福音を伝える器とされたということです。そこにある、驚きと、畏れ多き思いが、へりくだりの中に込められています。これが、神の恵みに触れられた姿です。パウロは、エルサレムに行く旅の中で、エペソの長老たちに、謙遜を尽くしたと言っています。「使 20:19 私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。」

そして柔和も、神の恵みによって身に着きます。神が主権を持っておられることを、恵みを知った者たちは知っています。自分ではないのです。だから、自分のことは、はっきりいって、どうでもいいのです。神の福音が、キリストのすばらしさが伝わりすれば、他のことはかすなのだと分かっています。だから、自分の強い意志を人々に押し付けなくとも、キリストがその人々を支配してくださるので大丈夫だ、となるのです。それで、人々に押し付けるのではなく、譲歩する、柔和になることができます。自分ではなく、主のみこころが成り、そして御国が広がっていくし、自分自身も御国を受け継ぐようになります。

そして、「愛をもって互いに耐え忍び」ですね。ただ我慢することではありません。愛をもって耐え忍びます。愛は、相手の成長を待ちます。その人が良くなっていくことを待つ力を与えます。そして、相手を知って行こうとします。その深い理解、憐れみをもって相手が良くなっていくのを願います。それで、愛によって互いに忍び合うことができるのです。

その結果、どうなりますか？「平和の絆で結ばれて」とあります。キリストはすでに平和です。その平和を互いの間に絆としていくには、愛をもって互いを耐え忍ぶという実践が、訓練が必要なのです。ユダヤ人とギリシア人が、どれほど生活習慣が違いが知れません。宗教の背景も違います。また、自由人と奴隷も同じです。男と女の違いもあります。しかし、すでにキリストにあって一つにされています。その霊的実体を、私たちは互いに忍び合うことによって体験することができます。

そして「御霊による一致を熱心に保ちなさい」と言っています。新しく御霊によって生まれたのであり、その新しい人において私たちはすでに一つです。すでにある一致なので、それでパウロは、「保ちなさい」という言葉を使っています。「熱心に」と言っているのが大事です。消極的ではいけないのです、積極的に一致を保たないといけません。つまりは交わりをすることです。共に生きる

ように、自分自身が他者に働きかけることです。2章の平和について学んだ時に話しましたが、争いごとが起こっていないことが平和ではありません。そうならば、ユダヤ人と異邦人は、別々に生活していましたから平和でした。そうでなく、交わったのが平和だったのです。

## 2B 一つの神 4-6

<sup>4</sup> あなたがたが召された、その召しの望みが一つであったのと同じように、からだは一つ、御霊は一つです。

召しの望みは、先に話した、キリストにあって神の国を共に受け継ぐことです。いかがでしょうか、自分が気に食わない人も、ただ信仰によって、神の恵みによって救われたということで、同じ望みを抱いています。ということは、私たちが目に留めるべきことは、本当に天であり、天の望みの喜びを分かち合うことですね。その他のことは、この召しの望みに比べたら大したことではないのだというへりくだりが必要です。

そして、からだは一つです。別々のからだがあるわけではありません。他の教会の人々。そして他の教団や教派の人々。その人たちとも、一つのからだにつながっています。この、「つながっている感」がとても大事なのです。私たちが、他の人々が間違っていると感じていることがあっても、自分のからだをむち打つことは難しいように、憐れみと神への恐れがあって、その間違いを正します。なぜなら、自分とつながっているからです。そして、御霊について、自分たちの受けている神の御霊と、彼らは異なる霊を受けているのだとしたら、それは間違いですね。同じ御霊を受けているのです。主の御霊の現れが異なっているので、彼らの礼拝には御霊が働いておられないということではないのです。

<sup>5</sup> 主はひとり、信仰は一つ、バプテスマは一つです。

主イエス・キリストはお一人です。けれども、自分たちの仲間にだけイエス様がおられて、他の人たちが唱えているイエスは異なるイエスなのだとするのは、間違っています。もちろん、明かに異端である場合には、異なるイエス、異なる霊によるものですが、そうでなければ、同じイエス様をあがめています。

このことは、一つになるのにとっても大事です。十二弟子たちには、取税人のマタイと、熱心党のシモンがいました。熱心党は、神の国が到来するためには武力で戦うことも辞さない、民族主義者でした。取税人は、ローマのためにユダヤ人から徴税する人で、しかも自分の懐にその一部を横領する人であり、ユダヤ人にとって憎むべき存在です。熱心党员が他のユダヤ人を、不敬の罪があるとして剣で殺すことはよくあることでした。けれども、なぜシモンとマタイが共にいることができたのでしょうか？主イエスが真ん中におられるからです。主に対する献身と忠誠があるので、シモ

ンとマタイの間には平和がありました。

バプテスマも一つです。どこかの教会で受けたバプテスマを、私たちは認めませんという教会がしばしばあります。例えば、水滴を落としてそれを洗礼とする滴礼がありますが、全身を浸すことがバプテスマであると信じる浸礼派があります。浸礼を信じている教会の人が、滴礼はバプテスマとは認めないというものがあります。教派が大きく変われば、この壁はかなり高いです。もし私たちが仮に、カトリックになります、正教会の信者になりますということであれば、新たにバプテスマを受けなければいけません。そういうことがあるので、バプテスマがいくつもあるように見えます。しかし、パウロは一つしかないというのです。

<sup>6</sup> すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父である神はただひとりです。

父なる神ご自身の性質を、詳しくパウロは書いています。すべてのものの上におられます。支配者であられます。そして、すべてのものを貫く、つまりすべてに関わる主権者であられます。理神論といって、神は世界を創造してからは、被造物に関与していないというものがありますが、それは間違いです。そして、すべてのものの中におられる方です。被造物から別たれている方ですが、被造物のうちにおられます。そのご性質が完全な形で現れたのが、肉体を取られたキリストです。この方が、すべてのものの父であると言われます。父として、すべてのことに関わっておられます。

こうして、パウロは、三位一体の神がおられることを明らかにしています。御霊、主、父がそれぞれ一つなのだとパウロは、論じています。

## **2A 御体の建て上げ 7-16**

こうして、私たちの召しの望みが、一つになることです。神ご自身が三つにして一つであられるように、私たちもキリストにあって一つになることが、召しの望みです。その目的に向かって、キリストが行われることは、賜物を与えることです。教会が、キリストのからだとして建て上げるために、建て上げるように人々を整える賜物を、与えてくださいます。

## **1B 恵みの賜物 7-10**

<sup>7</sup>しかし、私たちは一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられました。

「しかし」とパウロは言っていますね。なぜかという、私たちは一つであることをパウロが強調していましたが、ここで、「一人ひとり」と、それぞれ異なる賜物を与えられることを暗に示しているからです。教会が一つのからだとして、一人のキリストの似姿になるために、いろいろな賜物が用いられます。それぞれが異なる賜物であり、働きですが、それぞれがその分を果たすことによって、

不思議な一致を見るのです。いや、異なっていて一つであるという、三位一体の神のなされる業なのです。父、子、聖霊という別の人格があるのにひとりであられるように、私たちも異なる賜物と働き、奉仕があるのにもかかわらず、むしろ一つとなっていくのです。

<sup>8</sup> そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。」

午前礼拝でお話したように、ここは詩篇 68 篇からのものです。主ご自身が、戦争で勝利して、都に凱旋する将軍として描かれています。当時、都ローマに入る将軍が、征服した捕虜を引き連れて凱旋します。そして王は、この勝利のために市民たちに贈り物を与えます。キリストご自身も、十字架と復活の御業で、このことを行ってくださったのです。コロサイ書 2 章 15 節です、「そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」イエス様が、十字架のみわざ、そして復活によって、これまで持っていた、闇の力を失いました。人々を暗闇の中に入れる力を失いました。彼らが、捕虜としてさらしものにされています。これが、ここの「いと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き」ということです。

<sup>9</sup> 「上った」ということは、彼が低い所、つまり地上に降られたということではなくて何でしょうか。<sup>10</sup> この降られた方ご自身は、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方でもあります。

イエス様は、天から地上に降られました。「ヨハ 3:13 だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。」父のふところである天から主が降られ、地上で歩られました。しかし、再び天に昇られました。その時は、「もろもろの天よりも高く上られた」とあります。これは、いと高きところ、神の右の座に着かれるためです。あらゆる権威、主権、力と呼ばれる霊的存在よりも高いところに置かれ、あらゆる名にまさる名が与えられました(エペソ 1:21)。

そして、すべてのものを満たされるのですが、エペソ 1 章 22-23 節ですすでにパウロは、こう述べています。「22 また、神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。23 教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。」このようにして、霊的にはすでにキリストがすべてのものを足台に置かれ、そのキリストが教会で満ちておられるということです。こんな恵みはあるでしょうか？宇宙を動かす方の中心部分が、教会にあるということなのです。

そして、詩篇 68 篇に戻りますが、「人々に贈り物を与えられた」とはどういうことでしょうか？これが、聖霊の賜物です。「使 2:33 ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」主がいと高き

ところに上がられて、そこで御父から聖霊をイエス様が受けられました。もうひとりの助け主です。そして、五旬節に弟子たちが集まって祈っているところで、主が聖霊を注いでくださいました。これが、贈り物です。なぜなら、信じるすべての者に分け与えてくださったからです。

## 2B 奉仕の働きの整え 11-13

<sup>11</sup> こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。<sup>12</sup> それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。

聖霊の賜物が与えられて、どのような賜物があるかは、ローマ 12 章、コリント第一 12 章から 14 章まで、そして、ここの箇所があります。もちろん他の手紙にも、賜物についての言及があります。パウロは今、いろいろな賜物の中でも、人々がそれぞれの賜物を用いてキリストのからだの建て上げをすることができるように、その人たちを整える賜物について、話しています。建築現場であれば、それぞれ建築の位置について作業するのですが、そこにいる現場監督のような存在です。11 節を見ると、「キリストご自身が」立てておられます。

第一、そして第二に出てくるのが、「使徒たち」と「預言者たち」です。使徒たちと預言者たちは、教会の土台として、キリストご自身が立てたことが分かります。「2:20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。」使徒とは、遣わされた者という意味です。主イエスから、その権威を任されて教会の建て上げのため、土台を据える人々であります。十二使徒はもちろんのこと、それ以外にも、使徒たちがいます。パウロは、主ご自身から任命を受けた使徒です。そして、バルナバやイエス様の兄弟であるヤコブも使徒です(ガラ 1:19)。第二次宣教旅行で同行したシラスも、使徒として見なされている箇所が、あります(1テサ 2:6))。ロマ 16 章では、女性の使徒の存在さえもパウロは言及しています(7 節)。遣わされている者ということであれば、十二使徒以外にも、いろいろいることは想像できます。パウロは、使徒としての資格は、「しるしと不思議と力あるわざによってです」と言っています(Ⅱコリ 12:12)。

そして預言者ですが、ここでは先のことを伝えるというよりも、神からの言葉を授かっている、それを語っているとうことですね。アンティオキアの教会で、指導者たちが祈っている中で、バルナバやパウロが預言者の一人として数えられています(13:1)。先ほど話したシラス、そしてユダという人が、預言者であることが使徒 15 章にあります。二人がアンティオケの教会に来た時、「ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、力づけた。」ということですから(32 節)。このように、預言者と呼ばれている人々が、使徒とも呼ばれている人たちもおり、つまり、遣わされて、預言の言葉も語り、それで教会の土台を据えて行ったと考えられます。

そして、「伝道者」であります、そのように呼ばれているのは、ピリポがいますね(使徒 21:8)。

サマリアでの福音伝道の働きには、めざましいものがありました。またテモテには、「伝道者としての働きをなし、自分の務めを十分に果たしなさい。(Ⅱテモ 4:5)」とパウロが激励しています。福音を伝えていく務めです。

こうして、使徒たちが教会の土台作りをして、その時に預言者が神の言葉を取り次ぎます。そして伝道者は、伝道の働きをするのに、いろいろなところを巡ります。そして「牧師また教師」であります。ここは一対になっていて、牧師であるならば教師である、という、つながりがあります。そうした中で、一つの羊の群れに留まり、そこで、みことばによって教え、養い、また狼のような敵から守る働きをするのが牧者です。ある牧師さんが、KGKという全国にある、キリスト者の学生団体の総主事のことで、彼自身も以前そこで主事であったので、助言のようなことを言っていました。「学生の集まりで、みことばを取り次いで、喜ばれても、自分がいざ教会の牧会者となれば、毎週、いつも基本的には同じ人々に、みことばを取り次がないといけない。ただ聴衆受けをする言葉を語ればよい、というものではない。」ということです。そうなんです、いうならば、毎日の栄養価の高いご飯を、しっかりと三食食べさせるお母さんのような働きです。外食で高級レストランに連れて行って、そこで感動的な味を楽しむのではなく、時に、「お母さん、いやだ～、これ食べたくない！」と嫌がられても、それでも何とかして食べてもらうよう、お母さんは手塩をかけて、何とかして食べさせていきますね。これが養いです。

このように、キリストご自身が賜物の与えられた人々を立てておられますが、ここで教会の中で議論があります。「どこまでが、今日の教会に与えられているものなのか？」ということです。使徒と預言者が、教会の土台になっているというところから、彼らは聖書の正典が完成するまでの過渡期に与えられた賜物であり、現代は存在しないというものです。けれども、ここでは気をつけないといけません。そこまでの明確な線引きがされているわけではないのです。もちろん、新約聖書をもって、すべての特別な啓示は終わっています。そういった意味での新たな啓示はありません。けれども、使徒と預言者は存在しないというのは、キリストの賜物の理解としては、乏しくなってしまうと思います。

使徒と言っても、十二使徒やパウロのように、神から特別な任命を受けた人もいれば、遣わされて教会を建て上げる、今日の宣教師や教会開拓者のような人たちも、使徒的な賜物を持っているといつていいでしょう。預言者も、諸教会にも普遍的な言葉をもって語るものもあり、そして、地域教会の特定の状況の中で、励ましのために与えられた預言の賜物もあるでしょう。コリント第一14章を見れば、預言者という務めでなくとも、みなが預言の賜物を求めるように勧められています。

もちろん、新約聖書で特別な啓示は完了しました。それ以上の啓示があるとするのは、黙示録の最後が警告していますし、それゆえ、モルモン教のモルモン経という、聖書とまた別の聖典があることは間違っていますし、統一協会の原理講論も同じです。私は牧者として、使徒たちの教えに

忠実であるべきであり、それは新約聖書に書かれている使徒たちの教えと生き方に忠実だ、ということ。けれども、使徒的な働きは、宣教師や開拓伝道に存在し、預言も個々人に語られるものとして存在し、それが人々を励まし、力づけ、徳を高めるのです。

そして伝道者でさえ、伝道者の務めが与えられている人たちがいますが、伝道の働きをすることは、すべての信者に与えられたものです。牧者や教師であっても、ある意味、一人の信仰的に若い人に重荷をもって、みことばによって育てて行こうとするならば、牧会的な働きをしていると言ってよいのです。キリストご自身が立てておられる人々もいますが、その賜物はその人たちだけに限定されたものではありません。

そして、彼らが行うのは、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ」とあります。ここの「奉仕」は、「執事」とも訳すことのできるギリシア語が使われています。つまり、具体的な奉仕であります。仕えることです。人々の足を洗うような働きです。必要があっても、それを誰も手を付けないようなものがあるとしても、それでも手を出していくような働きです。牧者チャックのことについて、ラウル・リースが目撃したことの証言があります。彼が結婚式の司式が終わって、その正装の姿で、下水溝にごみが詰まっているのを見つけたのだそうです、それで腕をまくりあげて、そのごみを取り出しました。こういったことが、奉仕の働き、手を汚し、仕える働きです。

そして、このことによって、神の恵みが教会の中で満ちて、キリストが真ん中におられるようになります。イエス様が言われました、「ヨハ 13:14 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」イエス様が、弟子たちの真ん中にいて、それで仕えておられました。私たちが、主から与えられている賜物を用いて、仕え合うことによって、キリストが真ん中におられて、神の恵みがそこに満ちるのです。もちろん、人はキリストについてのことばを聞き、それを信じて救われるのですが、その実体というか、キリストがおられる！と証しするのは、まさに私たちが仕え合っているところにあるのです。ペテロが第一の手紙で、このことを話しています。「I ペテ 4:10-11 それぞれが賜物を受けているのですから、神の様々な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合いなさい。11 語るのであれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕するのであれば、神が備えてくださる力によって、ふさわしく奉仕しなさい。すべてにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。この方に栄光と力が世々限りなくありますように。アーメン。」

そして、「整える」という言葉ですが、元々は、「修繕する」とか「網を繕う」というような時に使います。これは、主に召された者たちが集まっている時に、初め弟子たちが誰が一番偉いかと、議論しているところから、イエス様が給仕をする者になりなさいと言われましたね。そして、後に聖霊が与えられて、それぞれが仕える者になっていきました。このように、整えられることであります。ところで、多くの人たちが、聖書を学ぶことに熱心な人たちが、その知識を増し加えることが目的になっ

ている場合があります。そういった人たちが、教会を、愛をもって建て上げるのではなく、教会を倒すようなことをする人たちもいます。けれども、パウロがテモテに聖書についてなんと言ったか？有名な第二テモテ 3 章 16 節なのですが、目的については知られていませんね。16-17 節を読みます、「16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。17 神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。」良い働きのために十分に整えられた者となるためなのです！

<sup>13</sup> 私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。

私たちが、奉仕の働きをしていく中で、つまり仕え合っていく中で、私たちの間に神の御子に対する信仰と知識が増し加わります。そうです、仕えることによって初めて、キリストの知識を得るのです。この聖書を開いてイエス様を知るのですが、この方の命令を守り行うことによって、この方を信頼し、そして、知っていきます。

その中で美しい御霊の働きを見ます。それは、「神の御子に対する信仰と知識において一つ」となっていくことです。キリストを信頼して、知っていくことにおいて、私たちが一つであるという実体が与えられるのです。理念や概念で一つになっているのではなく、体感さえもともなって一つになっていることを確信するのです。

そして、「一人の成熟した大人となって」いくのです。具体的に手を動かし、足を動かしていく中で、仕え合っていく中で、キリストを知っていくので、成熟していきます。そして、「キリストの満ち満ちた身丈にまで達する」とあります。ちょうど、背の伸び盛りの子の話をしていて、十分に大人になって背が伸びたのを表現しており、キリストの似姿に変えられることを表現した者です。主が清いように、私たちが清くなります。主が正しい方のように、私たちも義の行いをします。主が愛された方であるように、私たちも愛し合います。主が赦されたように、私たちも赦し合います。

### 3B キリストに向かう成長 14-16

<sup>14</sup> こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、<sup>15</sup> むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。

キリストに向かっていく成長について話しています。「もはや子どもではなく」と言っていますが、コリント人への第一の手紙で、キリストにある幼子、肉に属する者たちについて学びましたね。妬みや争いがあり、また偽使徒たちがやってきた時に、そちらを信じて、これまで養い育ててきたパウロを敵視するという、愚かな者たちもいました。そういった子どもではなく、キリストに向かって成

長するのです。

私たちの歩みの中で、ここに書いてあるような「**教えの風**」というものがあります。ここで、「**もてあそばれたりする**」という表現は、イエス様が弟子たちと舟の乗っておられた時に、ガリラヤ湖が嵐になった時に使われています、「**荒波**」と訳されているところです(ルカ 8:24)。

このように、キリストにある敬虔に結びつかない、荒れた状態にさせるのは、その教えに、人の悪巧みや、悪賢い策略があるからだ、ということです。イエス様は、サドカイ派やパリサイ派のパン種に気を付けなさいと言われましたが、それは、彼らの偽善であるとありました。パン種は、わずかなものですね。あまりにも明らかな偽りは、偽りとして認めることができますが、一見、まともに見えるものがありますが、そこに自分自身の思惑があり、不純な動機、たとえば「人々にこれを教えれば、集まるだろう、動員できるだろう」とかいった思惑があり、それで正しいとされる教えに混ぜ合わせます。どんなに正しく見えても、それが偽りかどうかは、実によって判断できます。教会に分裂をもたらすような教えは、まさにこの「**教えの風**」です。

こういったものを、どうやったら見分ければよいのか？それこそが、ここでパウロが教えていることです。キリストに向かって成長することです。どうすればよいのか？といえば、霊的に、健康に育つことです。ここに、「**愛をもって真理を語り**」とあります。愛に根ざすことを、パウロは3章で祈っていました。愛が動機であり、その上で真理を語ります。福音の真理ですね、キリストにある真理です。キリストにある幼子は、離乳食のようなものしか食べられません、ヘブル書3章14節には、「**固い食物**」と書いてありますね。

そして、あらゆる点において、かしらなるキリストに向かって成長する、とありますが、キリストが「**かしら**」とパウロは呼んでいます。私たちはキリストのからだで、キリストがかしらです。どの人も、この方に聞き、この方の指令の下で動きます。牧者チャックは、ほぼ毎週のように、どのように教会を運営すべきか、助言を与える手紙が来るそうです。こうすべきである、ああすべきである、と。教会に経営コンサルタントは要らないのです！チャックは、キリストがかしらなのだから、キリストに聞いて、求めていくようにしていると言っています。ああだこうだという人は、まず、手を汚して仕えていません。次に、キリストがかしらではなく、自分自身がかしらになろうとしています。こういった人たちは、あたかも自分が預言者であるかのごとく、「これは、主に語られたことです」と言います。けれども、行いがともなっていませんから、それが偽物であることは一目瞭然なのです。

<sup>16</sup> キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれの部分はその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられることとなります。

教会の成長を、人体の成長に例えています。からだ全体が、その節々があってそれが支えてい

ます。つなぎ合わさっています。これは人体において、そうですね。そのつなぎ合わさっているという部分、関節なり、筋なりがあり、それらが人体全体を支えています。ですから、靈的に私たちが平和の絆で結ばれているということが、からだ全体を支えるのに死活的であります。

そして次に大事なのは、「それぞれの部分はその分に応じて働く」ということです。それぞれに与えられた務めがあります。召しがあります。賜物があります。それぞれが、キリストの量りによって与えられた力があります。それを行っていくのです。しばしば、手が目立つので、手ばかりを行っていく傾向があります。ある時は目が目立っているので、目ばかりを行っていく傾向があります。そうではなく、目の人もいれば、手の人もいるのです。それぞれが、主にどこに自分が置かれているかをわきまえて、その分のところで働くのです。

そして、そこで大事なものは「愛」です。愛がなければ、すべてのことは無に等しいです。その愛によって、建てられていきます。ここの「建てる」は、建築の時の言葉だけでなく、文脈を見れば、体が鍛えられる、まさに英語ではビルドアップという言葉が使われています。パウロは、エペソ 2 章でそうであったように、神の宮の建物のことも視野に入れて話しているのでしょう。建てられる、という言葉を好んで使いますね。日本語で使われている言葉としては、「建徳」でしょうか。徳を高める、ということです。

こうして、召しにふさわしい歩みについて見ていきました。パウロは、周囲の社会生活について、異教に囲まれた人々の中で、自分がキリストの教えに従うことについて話します。けれども、その前に、キリストにあって一つになるという召しについて話しました。私たちは、日常生活のほうが圧倒的に時間が多いので、社会生活で自分がキリスト者としてどう生きるか？が大きな課題だと思います。それはもちろん大事なのですが、それを中心にしてしまうと、教会は「やってくる処」となってしまいます。自分の家、職場が中心で、そこから教会にやってくるのです。けれども、聖書はその逆を言っています。教会は、「遣わされる処」なのです。元々、私たちが一つになって集まっているのが、神の召しであり、それからそれぞれの場に遣わされるのです。教会は、やってくる処ではなく、出ていく処なのです。